

2009-18

活動名	日常支援から災害対策まで一地域ぐるみの取り組み
要旨	急速な高齢化による独居・高齢者所帯が増加した地域で、認知症が地域全体の問題となる中、行政と住民が対等な立場で問題解決にあたる「まちづくり会議」が、日常支援から災害対策まできめ細かい支援活動を行っている。
応募者	習志野市谷津西部まちづくり会議 議長 太田 想三
連絡先	〒275-0026 千葉県習志野市谷津 5-27-2

日常支援から災害対策まで

—地域ぐるみの取り組み—

習志野市谷津西部まちづくり会議

議長 太田想三

(概要)

1960代から開発が始まった習志野市谷津地区は、急速に高齢化が進み、その中でも一戸建てが多い当谷津西地区は特に独居や高齢者所帯が年々増加し、それに伴い認知症患者や身体的障害を持つ人が地域全体の問題として顕著になってきている。

それらの方々を念頭に、大災害発生時に地域で助け合う活動を始めたが、その活動を通して日常の見守りやきめ細かい支援活動を続けている。

主な活動には以下のようなものがある。

- ① 年間を通して、敬老祝い金配布時や町会費徴収などの機会に各個をまわり高齢者の状況を調査し、それを取りまとめることで地域の状況を常に把握できるようにしている。
- ② その中で特に見守りや友愛訪問を希望される方に対しては、町会役員や民生委員・ボランティアが手分けして訪問活動を行っている。
- ③ 認知症に対する正しい知識を習得してもらうために、繰り返し勉強会を開催すると共に、キャラバンメイトの講習を受けた資格者によるサポーター養成講座を開き、100人以上のサポーターを生んだ。
- ④ 大災害時に災害時要援護者の支援を念頭に置いた防災訓練を実施、地域をあげた支援体制の構築を作り上げつつある。
- ⑤ 地域福祉事業所を立ち上げ、町会・商店街・地域福祉ボランティア団体と連携してより一層きめ細かい活動を目指している。

(地域の紹介)

千葉県習志野市は、千葉県の西部にあり政令都市である千葉市の西に隣接している人口 160,000 人ほどの比較的小さな市である。習志野の大きな特色は「子育て日本一」を目指す文教都市であるが、バリアフリー等は比較的遅れているのが現状である。

そのなかでも当谷津地区は、習志野市の最西端にあり、戦後直ぐに畑地を開発し住宅地となった高台と少し前までは海であったところを埋め立てた高層住宅が並ぶ低地に大きく分類される。低地の部分には、干潟・湿地保護のための国際条約である「ラムサール条約登録地」である谷津干潟が高層ビルの直ぐ隣にある大変珍しい風景をかもし出している。

私たちが活動するところは、高台地区にあり畑や森を開発して住宅地にしたために道路が狭く曲がりくねっており、それに沿って 2 階以下の一戸建ての住宅が雑然と並ぶ住宅地域である。この地域は 1960 年代から開発が進められて来た経過から住民の歴史も古く、それだけに高齢者のみの世帯が目立つようになり、独居高齢者も少なくない。

また家族と同居している高齢者も、家族の勤務の状況から昼間は高齢者のみの世帯も多い。

このような状態で万が一大地震が発生した時には大きな被害が発生する懸念も少なくない。

(活動の内容)

(1)地域連帯組織の構築

この町の最も大きな組織である「まちづくり会議」を中心としてこの地域にあるすべての資源を一本化することで、大きな規模ときめ細かい機動性がある活動により、認知症をはじめとする高齢者や障害者等災害弱者への日常からの支援活動をようやく軌道に乗せつつある。

ここに言う「まちづくり会議」とは行政と住民が対等に関係を持ち当該地域の問題解決に当たる習志野市独自の組織であり、この組織の最大の目的は全住民が参加し、住民自治の実現を目指していることである。

当該地区の「まちづくり会議」の最大のテーマは、「大災害発生時の高齢者等の支援活動」であり、そのためには常日頃からのコミュニケーションを取るために行なっている日頃からの見守り支援である。それを実現するために町会をはじめとする地域の組織を活用できる体制を構築している。

(2)現状把握と日常支援

何よりもまず、高齢者等の支援を必要とする人達一人一人の置かれている現状を把握し、また要望をきちんと整理する必要があると考えて、次の様な活動を進めている。

- ① 年数回(町会費徴収時や地域行事への参加の招待状配付時)にそのときの状態や希望を調査する。
- ② 見守りや訪問等を希望される方に対しては、町会役員やボランティアが手分けして支援を行っている。
- ③ 特に認知症患者へのサポートや専門的な知識を必要とする問題を解決するためにその道の専門家などの出馬を要請し対応している。
- ④ また重度の認知症患者のサポートに関しては地域福祉事業所の専門的な支援も貰っている。

(3)より適切な支援を行うための勉強

きちんとした支援を行うためにはそれ相応の知識を習得しておくことが肝要であると考えて、2002年より毎年テーマを決めて勉強会を実施している。

- ① 障害者への理解をテーマに、「視覚障害」「車椅子」「知的障害」「精神障害」「聴覚障害」などについて専門家や障害者の話しを聞き、実体験を行うことで少しずつ理解を深めている。
- ② 特に、認知症については、2年ごとに視点を変えて繰り返し勉強会を実施してきた。その中で、100名以上の認知症サポーターも養成してきた。
- ③ その中でも、「早期発見」「早期治療」の必要性を繰り返し訴えてきたことから少しづつではあるが成果が上がり始めている。

(4)各組織の支援

(a)町会等の支援

- ① 73歳以上の方を対象に敬老祝い品(今年度は新米 3kg)ならびに秋祭り

招待状を持参し、お祝いしている。

- ② 町会行事である「盆踊り」「秋祭り」「餅つき大会」などでは、敬老接待席を設けて一時を楽しんでいただくと同時に町会役員やサポーターとの交流を図っている。
- ④ 年1回防災訓練を実施して、災害に備えた用意やいざという時のサポート体制を確認している。
- ⑤ 繰り返し、訪問詐欺や振り込め詐欺に遭わないように啓発を行うと共に、定額給付金の申請等の手続きの支援も行っている。

(b)社会福祉協議会支部の支援

- ① 年8回独居高齢者を対象にした配食サービスを実施している。調理ボランティア12名がお弁当を作り、民生委員6名が手分けして25~26名の方に配っている。また年1回は地域の集会場を借りて食事会を開催し、地域の演芸ボランティアの方の協力を得て一時を楽しんでいただいている。
- ② 月1回、町会集会場を利用して「いきいきサロンひまわり」を開所して、さまざまなボランティアの協力を得て毎回10~15名の方に参加し・楽しんでいただいている。
- ③ 2~3年に一度、市の医師会や歯科医師会等の協力を得て健康相談や歯科検診などを行っている。

(c) 商店街の協力

- ① 工務店や電気店の協力を得て、簡単な修理や電球の交換等の高齢者では簡単に行えないことを代行してもらっている。
- ② 駅前広場にベンチを置いて、散歩の途中の休憩場所確保してもらおうと共に、地域に有志により絵画・書道展などの開催してもらい、できるだけ外に出てもらおう活動を行っている。
- ③ 交流サロンを開設し、絵画・書道・折り紙・マージャン・健康体操などを定期的実施してボケ防止に役立ててもらっている。

(5)地域福祉事業所の開設

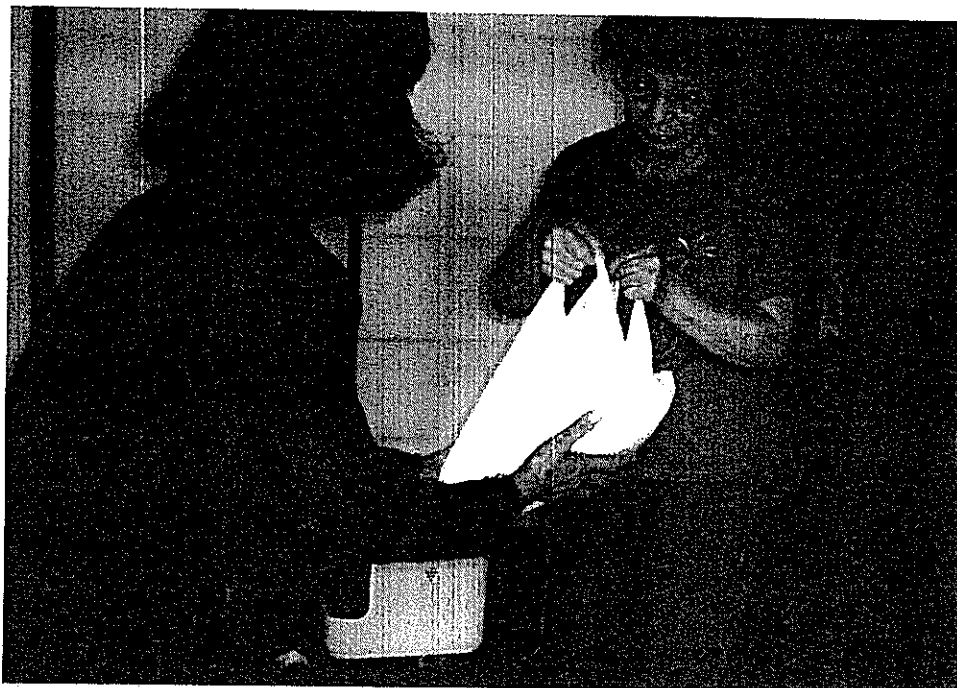
介護保険が出来る前に認知症を発症した母親に対してまだ認知症を理解していない中で介護を続けていました。今思うと認知症に対する知識があればもっと優しい介護が出来たのではないかと反省しています。

この思いを今、認知症患者を抱える家族の方々に繰り返して欲しくないとの思いから、亡くなった母親の部屋を改造して定員9名の小さな地域福祉事業所【ひだまり】を立ち上げました。

この小さな施設がこのまちで最後まで住み暮らしたいという高齢者やその家族の方のために役立つことを願い、日々奮闘しています。

この施設の運営に当たっては、たくさんの地域の方々の支援をいただき、この点でも当初の思いが実現できたことを嬉しく感じています。

また、地域の皆さんにとって高齢者に関する情報発信基地としての役割を果たしています。



写真一1 敬老祝い品配布時の聞き取り調査状況



写真一2 地域福祉事業所ひだまり風景

支部の活動報告

独居高齢者給食サービス



現在20～30名の73歳以上の独居高齢者の方に12名のボランティアがコミュニティ内調理室で食事をお作りして、ご自宅までお届けしています。

子育てサロン「エルフ」



谷津駅前「キラッ子ルーム」がお休みの第3火曜日に開催しています。

昨年10月14日に第1回目を開催。

ご参加いただいた皆さんの会話が弾み好評です。

いきいきサロン「ひまわり」



地域の皆さんが集まり、四季折々の唄を歌ったりされて、澆刺とした気持ちで楽しく時間を過ごされています。

また、さまざまな催しや誕生会等も開催していますので、第1木曜日には、いきいきサロン「ひまわり」にご参集ください。

秋まつり「敬老席」



昨年の秋祭り(谷津駅前北口広場)には「敬老招待席」を設け、お茶やお酒の飲物の他にお菓子と豚汁をお出しいたしました。

ゆったりと祭りと囃子を楽しまれたことと思います。

(活動の成果と今後の展望)

(1) 活動の成果

主な活動の成果として以下のようなものがあげられる。

- ① 勉強会を続けてきた結果、障害者や認知症の人に対する偏見がなくなったと共に、よく見ればこの地域でもサポートを必要とする人が多くいることを認識してもらえるようになった。
- ② このことから、認知症の人や障害者に対してさりげなく見守りを行ってくれる人が増えた。
- ③ 地域に連帯を通して行事への参加者が増え、同時の地域の問題に関心を持ってもらえるようになった。
- ④ 認知症の疑いがある人の家族が、速めに病院に行くか包括支援センターなどの相談に行くようになり、早期発見できる例が出てきた。

(2) 今後の課題

- ① 個人情報保護法やプライバシー保護の意識の高まりから、本来サポートを必要とする人の情報が得られないケースがある。これに対する対応を研究してゆきたい。
- ② 各組織の中心的な役割を担ってくれている人が高齢化しており、代替わりできていないので、団塊の世帯の参加を促したい。
- ③ 認知症を疑われる高齢者の家族の中には、それを認めたくないという人がまだまだいる。一層の啓蒙と支援を行ってゆきたい。
- ④ 新しい発想からより地域にためになる更なる活動を進めてゆきたい。

(完)